Lesson5 Strange but True

　世の中は、そのほとんどが二度と起こらないような奇妙な体験に満ちている。次に紹介する2つの物語は必ずや、「事実は小説よりも奇なり」である素晴らしい世界へと、あなたを導いてくれることだろう。

　オズの魔法使いは史上最も有名な映画のひとつだ。しかし、その本がどれだけ大ヒットだったのかを人々は忘れてしまっている。著者のフランク・ボームは、その本を書いた当時、訪問販売員をしていた。本が出版されると、それは瞬時のヒットとなった。ボームは仕事を辞め、新居に引っ越し、残りの人生をかけて（作品を）執筆した。

　映画は、世に出た時に映画館で人気になっただけでなく、数年間はテレビでも放送された。アメリカ中の子供はドロシーやかかし、ブリキの木こりやライオンを誰が演じていたのか覚えている。魔法使いについてはどうか？奇妙なのは、この登場人物が人々の心の中で目立たなかったことだ。魔法使い役を演じたフランク・モーガンは他の登場人物も演じているので、それは驚くべきことである。モーガンは映画の制作から10年後に死去した。しかし、多くの新聞社は彼の死亡記事欄にその問題を持ち出すのを忘れていた。

　モーガンは役のひとつで、衣装に擦り切れたコートが必要とされたマーベル教授を演じた。この役に合うコートを見つけるため、映画のスタッフが地域中に送り込まれた。彼らは多くのコートを持って戻ってきた。

　監督とモーガンは適したコートを選ぶために会った。彼らはそれを見つけた。それは古いが威厳があるように見えた。その上、それはモーガンに完璧にフィットしたのだ。彼らはそれが完璧なコートだと判断した。

　映画の撮影中はとても暑かった。あるシーンを終えた時、モーガンはあまりに暑くなってコートを脱いだ。彼は空気を通すためにコートを裏返し、仕立屋と元の持ち主の名前を見つけた。

　彼は自分の目を信じられなかった！

　モーガンはシカゴの仕立屋に電報を送った。仕立屋は、自分がそのコートを作ったとはっきり言った。それから、モーガンとスタッフは元の持ち主の妻に会いに行った。その老婆はコートを見て微笑み、「はい、それは今は亡き夫のコートです。」と簡潔に言った。

　そのコートの何がそんなに特別だったのだろうか？それはその元の持ち主の名前である。コートの内側に書かれていたのは、「L・フランク・バーム」であった。そのコートはオズの魔法使いの著者のものだったのだ。

　物語はいかがだったか。さて次に紹介するのは別の、違ったタイプの奇妙だが本当の物語だ。

　盗作はひどい罪である。それはつまり他の作家の作品をそっくり写すことだ。もしこれを学校ですれば、その科目では落第するだろう。もちろん、本や雑誌にある資料をそっくり写したり売ったりしてはならない。罰金を科されたり、刑務所に送られたりすることだってある。

　ではモーガン・ロバートソンについてはどうなのか？彼は有名は作家ではなかったが、彼のことをひどい盗作家だと呼ぶ人もいる。彼のフィクションの物語である「フューティリティ」は、1000人以上の人が死んでしまう惨事についてのものだった。なぜロバートソンを盗作で非難する人がいるのだろうか？

　まず、それは大西洋での物語だ。それはタイタンという大きな船についてのものだった。実際にはそれは800フィート（約244メートル）で、今までに建造された中で最大の遠洋定期船であり、防水の客室を多く備えたものであった。タイタンは沈まないのだ！

　次に、作中で船は、4月にイギリスのサウサンプトンから2000人以上を乗せて出航している。彼らの多くは金持ちだった。次に何が起こったかは分かるだろう。タイタンは時速46kmの速度で航海中に、氷山にぶつかったのだ。

　氷の塊にぶつかってタイタンは沈んだだけでなく、タイタンには乗客用の救命ボートがあまりにも少なかった。多くの人が冷たい水の中で溺れ、他の多くの人はタイタンと共に沈んでいった。

　ほぼ全ての点において、タイタンは、――その名前、大きさ、乗客数、スピード、事故が――、タイタニックのそれと似ていたのだ。なぜ出版社は「フューティリティ」を出版したのだろうか？モーガン・ロバートソンはタイタニックの物語を盗作して問題を起こさなかったのだろうか？

　1912年4月14日に氷山にぶつかり、数時間後の1912年4月15日午前2時20分に沈んだタイタニックにまつわる悲しい話に似た物語を執筆したことに関して、モーガン・ロバートソンは弁解の余地がなさそうである。彼は被害者に申し訳ないと思わなかったのだろうか？

　1つ小さな点が異なっていた。モーガン・ロバートソンは1898年にその本を執筆し、出版した。これは、ウィリアム・ピリーがかつてタイタニックの建造を夢見た時より何年も前である。「フューティリティ」は現実の事故のコピーではなかったのだ。それは予言だったのである。